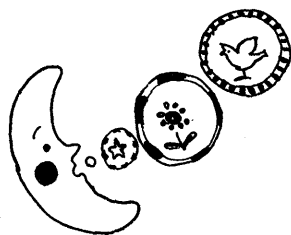


心象風景

星

渡部 潤一



「ピー・ピー・ピー……」

かん高いポケットベルの呼び出し音が、静かな寝室に鳴りひびく。ねぼけまなこで見る時計はもう真夜中をすぎている。いやいやながら受話機をとって、東京天文台の留守番電話に録音された内容を聞き出す。

「こちらは茨城県の……です。東の空に恐ろしいほどの光を発する物体がゆらゆらと浮いています。一体何でしょうか？」

やけに慌てている。見てはいけないものを見ってしまったという感じである。

本棚から、星座早見版と理科年表をとり出す。肉眼で見えるほど明るいことから、惑星にちがいないと思ひ、ページを繰る。答えはすぐ見つかつた。今、東の空に見えているのは木星。ちょうど地平線から上がって一時間ほどたつており、折からの強風で関東平野をおおっていたスモッグが吹き飛ばされ、ガラガラと輝いていたのである。「そうですね。あれが木星なんですか。」折り返し電話でその星の正体を伝えると、さも安心した様子である。

東京天文台というのは、文部省に属する研究機関であり、いわば役所である。ここに務める天文学者は私を含めて公務員であり、それぞれ与えられた業務についている。業務のひとつとして、アマチュア天文家が発見した彗星や新星を確認するという任務がある。見つけるのは夜なので、天文台は勤務時間外だが、緊急性を考えてポケットベル呼出付の留守番電話を備えてある。

そんなわけで私は月に何日か、このポケットベルを持たされることになる。もともとが新天体発見の情報を受けつけるものなので、冒頭のような質問電話には答えなくても良いことに業務上はなっている。だが、知りたいと思つてかけてきたのだから、全く無視してしまつては、公僕として面目が立たない。天文学者は夢を売る職業である。何なのかわからない星の正体を知ること、その人が星に夢を抱いてくれたら、と思うと深夜のポケットベルの呼出しもよしとしなくてはなるまい。

さて、この当番をはじめから、いろいろな電話を受けた。特によく晴れ上がった日には、星を全く知らない人からの質問が多い。おもしろいのは、それらの人々が同じ星に対して抱く感情が実にさまざまである、ということだ。前述の例では、木星の輝きを表現するのに「恐ろしい」という形容詞を使っている。この日ではないが、金星



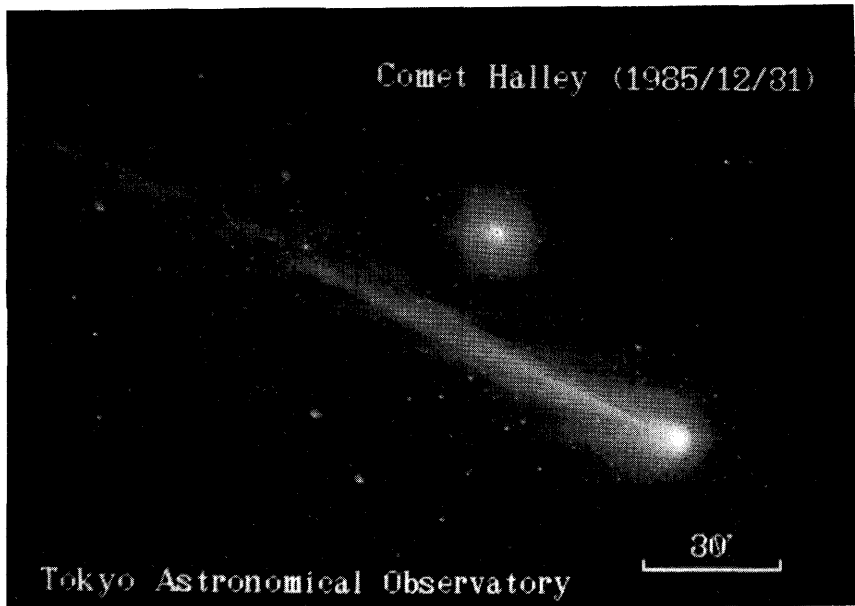
ヤシの葉かげの南十字星

に対して次のように質問してきた例がある。

「西の空に、きらきらと美しく輝く星があるのですが、あんまり美しいのでぜひともその名前を知りたいと思い、お電話いたしました云々……」

深夜の木星と夕刻の金星とは、かくも形容が異なるものなのか。確かに夕暮れの空に光り輝やく金星は全天で最も明るく、英語名ビーナスは女神を意味する。その美しさは比類なきものとして枕草子にも紹介されている。だが、木星の輝きも負けてはいないはずで、ギリシア神話では、快樂の神の宿とされている。ホルストの組曲「惑星」では、木星の旋律が最も喜びに満ち、荘厳な曲として知られている。これも木星が美しいゆえである。

この星を美しいと感じるか、それとも恐ろしいと感じるかは、その人がおかれた物理的、心理的状況によるのではないだろうか。



尾をひいたハレー彗星・東京天文台木曾観測所撮影

南十字星という名前は、星好きの人でなくても聞いたことがあるだろう。サザンクロスという英語名も結構有名である。日本からは見ることができない南天の星座で、十字架の形に明るい星が4つ並んだ小さなものである。大航海時代には、船の方向を知るのに星が用いられていたが、この南十字星は十字架の長い方が正しい天の南極を向いているということもあって昔から有名だった。

人間とは不思議なもので、北半球のいつも見ている星々にも美しいものがあるのに、見えない南十字星にあれこれと想像をめぐらせ、あこがれを募らせる。最近の円高での海外旅行ブームに乗った旅行会社の宣伝でも「二人で見る南十字星！グアム島の旅」とか「サザンクロスの輝くオーストラリアへ」とかいった謳い文句が目につくようになった。

二年ほど前のこと、仕事からみでサイパン島へ行く機会を得た。当然のことながら、ここでは南

十字星を見ることができた(写真)。南国ムードの漂うヤシの葉かげに、やや明るめの星たちが見事な十字架をなして、憧憬の南十字星に会えた感激で、何枚も写真を撮ったものだった。

そこで、日本から来る旅行者にハレー彗星(写真)や、南国の星々を案内する仕事、いってみれば天然プラネタリウムの解説員なのだが、その手伝いをさせられたことがある。星座の名前を教えたり、有名な星雲や星団を望遠鏡でのぞかせたりするわけなのだが、通常のプラネタリウムとちがって、お客さんの数がせいぜい10人程度だったので、一人一人に対してかなり丁寧に案内してあげることができた。そしてまたここでも、それぞれが全くちがった感じ方をしている、ということを知るに至ったのである。

「あれが有名な南十字星です。」

という、大抵の人はその名前は知っているの
で、へえーとか、はあーとか何らかの反応が返っ

てくる。そして、しばらくすると、一言、二言何らかの感想を漏らすのである

「やっぱり素敵ね。」というのは天文好きか、新婚さん。

「なんだ、たいしたことないな。」というのは働
きざかりの男性。

まあ、いろいろな事情のちがいはあるだろう
が、少なくとも同じ場所で、同じようにして全く
同じ星を見ても、これだけの差があることは確か
なようだ。

天文学を勉強しはじめた頃、気のあう友人たち
に誘われて、田舎の方へ星を見に行ったことがあ
る。晩秋の頃で、ずいぶん寒い思いをしなが
ら、寝袋にくるまって、ボンヤリと夜空を眺めて
いたのだが、そのうち、おまえは天文学を勉強し
ているんだから、何か話をしろ、といわれた。ち
ょうど冬の星座でおうし座が見えていたので、そ



プレアデス星団（すばる）

地球から四百光年の距離にあり、生まれたての若い星の群れてある。生まれたてといっても五千万年位はたっている。東京天文台木曾観測所撮影。

の中にある2つの星団（プレアデス星団とヒアデス星団）の話をはじめた。どちらも100程度の星の集まりのだが、距離が400光年と130光年（一光年は光が一年かかって届く距離）と3倍近くちがうので、プレアデス星団（写真）の方がごちゃごちゃ集まっているのに対し、ヒアデス星団の方はまばらに大きくひろがってしまっている。これらは専門的にいうと運動星団といって、個々の星の運動が測定されているために、直接的に距離の決められる重要な宇宙の物差し役目をしている。宇宙にひろがる何百億光年といった距離の決定は、この星団の距離を基本にしているわけで、調べてみれば宇宙への出発点である。そういうことを知ってか知らずか、「昴（すばる）」という歌は人生の出發を歌うものであった。すばるという名前はプレアデス星団の和名である。

さて、実際にその二つの星団に属する星々を見ながら、距離の話をしていると、今まで空にはり

ついたようなイメージでしか見ていなかったそれらの星々が、見事に遠近感をもって宙に浮きはじめたのである。これには我ながら驚いた。知識として与えられた距離という概念が、その見方まで変えてしまった。

星は点源なので、どんなに明るくても原理的に距離を感じることはない。半球の夜空をスクリーンとして等距離にあるものとして感じるほうが自然だろう。かつてインドなどの宗教画に描かれた宇宙はまさにそうであった。だが、一般に明るい星は近く、暗い星は遠いことを思うと、奥行きを少しは感じることができる。それ以上に、星の集まりの大きさのちがいを距離のちがいとして捉えたとき、この遠近感はかなりものになってくる。知識がものの見方、捉え方、感じ方を変えてしまい得るという実に鮮烈な体験であった。

この例は、知識がよい方向へ働いた例だが、天文学者になってみると、むしろ負の方向へ働く場

合が多い気がする。木星や金星の輝きの正体をはじめからわかってしまっているために、「恐ろしい」とか「美しい」といった感情が素直に言葉になるかどうか疑問である。

先日、岩手県花巻市にできた宮沢賢治記念館を訪れた。郊外の小高い山の上にあるモダンな建物で、賢治に関する資料の多くがここへ集められ、展示されている。その代表作である「銀河鉄道の夜」は私も好きで何回も読み返したものだ、それが出版されてから実に四回にわたって改稿されていることを知った。自分の作品に対してあくまで良いものをとという賢治の情熱を改めて知らされたのだが、考えてみると、当時あれだけ星の知識を吸収していたというのも驚くべきことである。今のように、星についての啓蒙書が出版されているわけでもなく、あるとすればかなりの専門書にならざるをえない。また、今と比べて格段に悪か

った岩手山村の経済・文化の状況から察するに、本一冊買うのにも大変だったのではないか、と思う。

ただ、偶然にも賢治は学校で科学を学び、岩手に帰ってから、当時、世界最先端で名を馳せた岩手県水沢市にある緯度観測所で天文学の書に触れることができたのである。それに、どんなところで夜空を振り仰いでみても確実に天の川（銀河）は見る事ができた。

これもサイパンでの話である。その夜は五人の家族連れのお客さんだけだった。東京から来たらしいその人たちは、黙って私の星座の解説を聞いていたのだが、しばらくして、そのお父さんとおぼしき人が空を横切る天の川を指していわく「これは雲ですか？」

いつまでたっても同じ場所にあるのをおかしい、と思ったらしい。私は当然のことながら天の川を知っているものと思ひ、敢えて説明しなかつ

たのだが、考えてみると、東京生まれで東京育ちなら、天の川を見たことがないのも当然である。

それ以後、必ず最初に、「この空を横切っているのが天の川です。」とやるようにしたのだが、大方の人は南十字星よりも天の川のほうに歓声を上げていた。

もう15年も前、ジャコビニ流星雨が降るといので、街灯を消して眺めようという運動が盛り上がったことがあったが、それもつかのま、高度成長を経て、日本列島は、夜でもその形が宇宙を飛ぶ人工衛星からはっきりとわかるほど光り輝やく国になってしまった。よほどの田舎に行かないかぎり、賢治が見たような天の川を見ることができなくなってしまうのは、さびしいかぎりである。

夜空を眺めていると、いくつかの人工衛星が飛んでいくのを見ることが出来る。星々の間をぬつ

てスーッと動きながら、明滅したり、時にはピカッと閃光を発したりする様は、何となく不思議なものである。変化のない星空では、一種のアクセントになって美しい。

しかし、これらのほとんどが軍事衛星であることを知ると、美しいというような感情は湧いて来ないだろう。むしろ冷たく、恐ろしいものと思えるにちがいない。昨年打ち上げられた人工衛星100余のうち、明らかに非軍事用のもの（気象、科学研究、資源、放送、航行用）は、たった30弱である。宇宙兵器の研究は着実に進んでいるらしい。唯一の救いは、日本の人工衛星がすべて、今のところ平和利用のものばかりであるということだろうか。

今まできれいなものとしてみていた人工衛星が、こんなことを知るに至って、冷酷非情なものに見えてきた私なのだが、それでもまだ良いほうかもしれない。先日、『星座めぐり』（野尻抱影

著）を読んでいたら、次のような文章を見つけたので紹介したい。

「……空襲が烈しくなって来てからは、星に対する反感が急激に加わって来た。……（中略）……：焼夷弾の火の雨を模倣して私たちを威嚇しているような星の光、遠ざかって行く大編隊をつくりのオリオン星群……（中略）……幾たびか草地に腹はいながら、まったく憎悪さえ感じて、空から看下ろす無数の冷厳な眼を睨め返していた。」

何百年、何千年といった悠久の昔から、星は変わらずに光り続けている。変わるのは、それを眺める人間のほうで、その人の気持を映す鏡の役目を星がしているだけなのだろう。星はその人の心象風景なのかもしれない。

（東京大学東京天文台）